

■特集

見つめてみよう、わがまちのヒストリー



まちのかたちは、

私たちが今住んでいるまちの、何げない風景。時とともに変わるまちの姿には、実は、人の想いやつながりが息づいています。そこで今回の特集では、まちづくりに込める「人のこころ」にスポットを当て、移りゆくまちを訪ねてみました。

人のこころが創る。



文政年間の蔵づくり住宅、井原庸次邸の前で。バラのまち中央区アートフェスタ実行委員長の加藤圭子さん(前列右から3人目)を中心に、笑顔が弾ける実行委員の皆さん。

与野本町通り



市民・商店会・行政が協働で取り組む「蔵」を生かしたまちづくり

与野本町通りは、古くは武士が行き交う鎌倉街道として、また、江戸時代には農作物などを商う「市場のまち」として栄えてきました。まちの成熟にともない、度重なる大火に遭っていたこともあり、前庭と漆喰の壁を持つ土蔵づくりの町家が造られるようになりました。この町家は、現在でも点在

▲9月に開催された、4回目となる「蔵のまちコンサート」での、モンゴルの馬頭琴演奏。座席は、町内の畳屋さんがゴザを出したり、酒屋さんのビールケースの上に板を置いてベンチにしたりと、すべて手作り。ゆったりとした、温かい雰囲気が漂います。
◀昭和40年代の朝市の様子。時代を通じて培われた風景です。蔵づくり住宅の前庭は、大火を防ぐ火除けの役割とともに、市場の「場」としても活躍。まちに繁栄をもたらしました。



し、当時の面影をしのばせています。「蔵づくりのまちなみを地域の活性化に生かしたい」。このような想いが徐々に高まった平成18年。魅力あるまちづくりを市民が主体となって話し合う「中央区区民会議」で、「蔵のまちコンサート」のアイデアが生まれまし。舞台となる蔵づくりの家主さんも、「継続的な活動でまちの活気に繋がるのなら」と快諾。こうして、地元の有志や商店会、行政がひとつになって、実行委員会が設立されました。「少しでもまちがにぎやかになれば、商店会ももっと元気になる」と思い、喜んで引き受けました」と当時地元商店会の会長だった飯村八郎さん。さらに皆で準備を進めるうちに、「与野のまちをまちづくりは、まちを知る」と挨拶から鈴木さんが地元に興味を持ったのは、会社の常勤を離れた5年前。50年も住んでいるのに、まちのことは何も知らないことに気づき、区民会議に参加。「歴史的背景を知り、まちにロマンを感じるようになりまし」と話します。飯村さんは、まちづくりの秘訣について、「何よりも大切なのは、人と人とのつながりです。まずは挨拶から始めよう」と教えてくれました。

コンサートで繋げよう」という想いに発展。「蔵のまちコンサート」に加えて、さいたま新都心での「LOVE & PEACEコンサート」、彩の国さいたま芸術劇場での「区民コンサート」の3部構成で開催する「バラのまち中央区アートフェスタ」として結ばれ、より魅力的なイベントとなったのです。コンサート当日は、来場者が会場からあふれるほどの盛況で、「バラのまち」ならではのかわいいミニバラの配布サービスも行うなど、かつての「市場のまち」さながらの熱気に包まれました。「与野の誇りとなるイベントを目指しています」と実行委員会会長の鈴木勝彦さん。アートを柱としたまちづくりは、これからも広がります。



▲実行委員会副会長の鈴木さん(左)と、西与野商店会連合会前会長の飯村さん(右)。